

通訳の原理に関する省察(下)

近藤正臣

(大東文化大学名誉教授・モントレー国際大学院客員教授)

5 日本語話者としての補遺

以下においては、日本語話者として以上のセレスコヴィッチなどの「意味の理論」に重要ないくつかの命題をいわば補遺として追加することによって、現代における通訳の原理についての省察としたい。セレスコヴィッチやキルヒホーフは日本語との通訳を頭に置いて「意味の理論」を練り上げたのではない。日本語話者ならでの論点を提示できれば、これこそが、日本人にできる、世界の通訳研究への独自の貢献となる。

5.1 本エッセイ(前半)への補足

これに入る前に、本エッセイの前半について、1点だけ特に補足しておきたいことがある。それは、ここで通訳者のとらえる<意味>は、決してアバウトなもの、おおよそのもの、通訳者が想像・類推したようなものであってはならないということである。いわば、通訳者はSLを「精密に理解し、把握」しなくてはならないということである。

5.1.1 起点言語の理解は精密に

日本の英語教育は近年、オラコミとかコミュニカティブ・イングリッシュとか言われ、これは、すでに鳥飼氏が「コミュニケーション能力には本来、文法的知識も含まれるのだが、現状を見る限り『コミュニカティブ・アプローチ』イコール会話、に終始する授業が少なくない。その結果として当然のことながら出てくる問題は、基礎力不足、語彙力欠如であり、英文を読んでざっとした意味をつかむことは出来るようになっても、きちんと仔細に読んでいくことが苦手になることである。... 茫漠とわかって...。大意をつかめば...」(鳥飼、1997、64ページ)として鋭く批判している。ましてや、このように、SLの英語をいわばアバウトにしか理解できないで、そのように理解したものに基づいてTLとしての日本語に訳すのはきわめて危険である。

最近、小松達也氏が『英語で話すヒント—通訳者が教える上達法』(岩波新書)を公刊された。小松氏は筆者にとっても先輩で、長い通訳者としての経験と1970年代以来の通訳者養成の経験とがあいまって、興味深く有益な本になっている。英語・日本語の特徴だけでなく、それぞれがその一部となっている文化にも触れるところがあり、英語の学習にも有益なアドヴァイスが多いと思う。そして最後の章は「継続は力なり」とある。英語環境の中で育つのではなく、英語を学習して習得しなくてはならない者には、まさに「継続は力なり」であり、我が意を得たり

と感じる。

ただ、以下の1点に関しては大きな疑問を感じるので、これを無視するのは小松氏にも失礼になるのではないかと思ひ、この場所を取り上げたい。通訳者の仕事として、まず SL を正確・精密に理解することは必須の作業であるという重要な点に関わるからである。

氏は以下のように言っている。

「通訳がいくら流暢で雄弁に聞こえても、間違っていたり客観性を欠いたりしては通訳としての価値はありません。正しい聞き取りと理解こそ通訳者の命なのです」

としながら、すぐ後に続けて次のように言う。

「そして通訳における①理解とは、第1章で述べたように、話し手が伝えようとする意味(“intended meaning of the speaker”と言われます)を正しく捉えるということです。そのためには必ずしも言葉に忠実であるということではありません。言葉を通して何を伝えようとしているか、が重要です。そのためには、先にも述べたように、使われた全ての単語を聞き取る必要はありません。聞き取れた語を通して、要点がつかめればいいのです。ここならこういうことを言うだろう、こういう状況ではこんなことは言わないはずだ、などとコンテキストを考えて類推します。このような通訳式理解②の方法は、通常の対話における聞き取りにも大いに役に立ちます。」(小松, 2013: 46-47)

さらにこの部分を以下のように締めくくっている。

「会話や通訳では③、...”Use your imagination.”(想像力を使いなさい)と言います。単語がすべて分かって、話し手の言っていることがよく分からないこともあります。それはひとえに知識と想像力の不足です。『すべての単語が分からなくてもいい、聞き取れた単語を中心に想像力を働かせよう』—これがリスニングの最も大事なポイントです」(小松, op. cit.: 38)

この本の第1章で小松氏が言っているのはどういうことかと言えば、次のような聞き取りの仕方である。

「『すべての単語を聞き取ろうとする』というのが第2言語での聞き取りにおける最大の問題点なのです。流れてくる音声の中から2つでも3つでも単語が聞き取れれば、話し手の発した音声以外のいろんな情報を活用してかなりのことを類推できるからです。聞き取れない単語があったからといってがっかりすることなく、聞き取れた単語を中心に前後関係から何を言わんとしているのかを類推するという態度が大切です」(小松, op. cit.: 36)

小松氏のこの本では、実際に通訳者がしていることと、学習者がこれからすべきことについて、

分けているところもあるが、「通訳者はこのようにしている、その仕方を学習者もすればいい」と明快に言っているところもある。たとえば、上に引いた部分の下線部①～③がこれにあたる。よって本エッセイでは、通訳者がしていると小松氏が規定しているものと解釈して、論を進めたい。

すると、小松氏は通訳者のしていることとして、英語を聴いているときにいくつかの単語が聴き取れたら、あとは背景の知識やコンテキストを活用して、内容を「類推している・想像力を働かせている」と言っているのである。筆者は端的に言って、これはプロの通訳者としては許されないことだと思し、最低限、すべての通訳者がこのような仕方で行っているのではないと、はっきり明言する必要があると思っている。さもないと、「なんと『想像力』で通訳するのだ」と誤解され、さらに「大変役に立つ本だった」と皮肉たっぷりに揶揄されることになる(fkmamiko「カスタマーレビュー」Amazon.co.jp: 英語で話すヒント)。しかも、「21人中、19人の方が「このレビューが参考になった」と投票しているという。これでは、日本の通訳職全体が誤解されかねない。

背景の知識やコンテキストが SL の理解のために必須ではあるが、聴き取れた 2, 3 の単語を元にして聴き取れない部分を「類推」して、その結果を TL として発話する—これはきわめて危険である。例を出すまでもないかもしれないが、

There is a little beer left. =少しビールが残っている。(1)

There is little beer left. =ほとんどビールは残っていない。(2)

He has a few really good friends. =少数だが、親友がいる。(3)

He has few really good friends. =親友はほとんどいない。(4)

これらの文では、不定冠詞 a があるかないかで、肯定の意味か否定の意味かが分かれる。非常に簡単な<a>という単語ひとつが聴き取れるかこれを逃がしてしまうかで、話者が言うことが逆になるのである。

それどころか、If you see the glass half empty and say, “There is a little beer left,” then you are an optimist. If you see the same glass half empty and say, “There is little beer left,” then you are a pessimist. (「コップに半分くらい残っているのを見て、『ビールが少しは残っているよ』と言うのなら楽観主義者、おなじコップをみて、『ビールはほとんどない』と言うなら悲観主義者だ)だとされることがある。<a>という不定冠詞が付くか付かないかで、楽観主義者か悲観主義者が決まってしまうのである。

英日同時通訳においては、一方でひとつまえの意味のチャンクを日本語で発話しながらも、話者がしゃべっている後続の英語はひとことも聴き逃がしてはならないし、聴いている内容をそのコンテキストに置いて精密に理解し続けることがどうしても必要である。このふたつの作業を同時にすることができれば、同時通訳は基本的にはできるとさえ言える。訳の日本語を発話しているときに、いわば「耳が留守になって」は、同時通訳をしていることにならない。ましてや、その間に聴いた 2, 3 の単語を元にその全体の内容を「類推」して通訳しているとは…。

最近の筆者の行う同時通訳訓練のなかでこんなことがあった。課題のスピーチの中で、ある日本人の若者が幼少のころからドイツに行く機会をもち、高校時代に AFS 留学生としてアメリカに行き、青山学院大学を出て職につき、結婚をしたと続き、その後、

But he did not get married in a Christian church.

と続いたのを、ある受講生は「そして彼はキリスト教の教会で結婚式を挙げた」としてしまった。Butのような論理の展開を示す語は絶対に聞き逃してはならないし、否定文を肯定文としてしまっってはもちろんいけない。このButやnotは、TLとして日本語を発話している間も、通訳者のattentionの半分くらいはこれを聴きとる方に向いていなくては、同時通訳をしているとは言えない。たしかに、日本の結婚式事情やこの若者の生い立ちというコンテキストから類推すれば、「教会で挙式した」ということは大いにありそうなことである。しかし、話者が言っているのは、「彼が教会でなく」神式の結婚式を挙げたということなのであった。このような話題ならば罪はないかもしれないけれど、基本的に否定文と肯定文を聴き間違えるのは決定的な誤りだと言わざるをえない。大きな誤解につながり、テーマによっては戦争が始まりかねないし、無罪の者が有罪になりかねない、患者が死んでしまいかねない。

しかし小松氏は同時に、たとえば次のように言って、この類推による英語理解が正確でないことを認めてもいる—「...耳に入る多くの単語のうちいくつ聞き取れるからは、状況によりあるいは聞く人の英語力により違いますが、私たちの多くが、聞き取られた単語をもとに推論する方法によって英語を理解しようとしています。しかしこの方法は便利あり確かに効果的ではありませんが、100%正確というわけではありません。なにしろ推論というか推理が大きな役割を果たしているわけですから...」(小松, op. cit.: 38-39)。また、ダライ・ラマ師の通訳をした際、前半に師の声の届きにくい場所で通訳したときより、後半になって、師のとなりに席をとって、「後半は師の話が聞き取れ、いい通訳ができたのではないかと思います」(小松, op.cit.: 68-69)ともしている。

英語を聴いて理解するという通訳者にとっての基本的課題について、小松氏の考えには多少のぶれがあるということであろうか。あるいは、自分の考える理想の姿はあるが、現実にはそうはいかないと自らを諭しているのであろうか。あるいは、厳しいことを言えば今の学生はくじけてしまうと思った上での親心なのであろうか。しかしそれは、真剣にこの専門職を目指す若者には、一種のおためごかしを言っていることになり、失礼に当たらないであろうか。ⁱ

もう1点、小松氏の著書に看過できないところがある。それは、英語で話す際、「音声面では、母音、子音といった個々の音の発音よりもリズムやイントネーションが大切です。」(小松, op. cit.: 76)、あるいは、「子音の発音でも、日本人は”l”と”r”の区別がつかないとよく言われます。しかし英語でコミュニケーションをとるという目的の上では、ほとんど障害になりません。」(小松, op. cit.:158)としている点である。ここに言う「リズム」、「イントネーション」は韻律(prosody)を指すと考えてよいであろう。

英語の母音には、英語を母語とする人の間でもいろんな発音があって、現在では、一概に「こうあるべきだ」というパターンはないと言わざるを得まい。世界はEnglishesの時代なのである。しかし、こと子音に関してはそうは言えない。いやしくもプロの通訳者として現場に出ていく者としては、[l]と[r]の区別は必須である。とくに[~dl~]および[~tl~]とつながったときの[l]の発音は、はっきりと[l]という音を出すべきであって、これを[r]にしてしまうと、friendlyがfriendryとなり、firstlyがfirstryとなるのはお愛嬌としても、Mr. AttleeがMr. A treeとなってしまう。また、たとえ

ば[p]や[s]の発音を英語風にすることによって、一挙にわれわれ日本人の話す英語は英語の音韻のクセに則った発音になる。しかも、これは「継続して」努力すれば、日本人にも決してできないことではない(くわしくは、近藤, 2009: 70-73 を見られたい)。

ここでは小松氏の近著を取り上げたが、大事な点を繰り返せば、起点言語の理解は厳密でなくてはならないということである。しかも、この理解は、話者の立場に立った理解でなくてはならない。この点はすでに本エッセイ(前半)で述べた。

5.1.2 再表現は<意味>を spontaneous に

ただし、起点言語の意味の把握は精密に行わなければならないが、これを通訳として再生するときには、個々の単語、文言、表現などに引きずられて、最終産物が translationese になってはならないことを、再度、確認しておこう。

セレスコヴィッチは、1989年に Marianne Lederer との共著 (Seleskovitch & Lederer, 1989) において、前著よりより明快に、通訳の過程を Three-Step Process として述べている。それは、以下のとおりである。

- 1 言語としての意味と言語外の知識を合体させて、意味を獲得する。
- 2 この意味を非言語化する。
- 3 この意味を言語として spontaneously に表現する。(Seleskovitch, 1989, p. 22)

ここで、セレスコヴィッチが「非言語化」という過程について、様々な批判に関わらず、これを改めようとしてはいないことも分かる。

そして、その中のいくつかのキーワード、術語などについては、これを定訳となっている日本語で言わなくてはならないことは、以下(5-5 以下)に論じるとおりであるが、(Seleskovitch & Lederer, 1989: 3, 90-99)ではこの点を認めている。特定の訳語を使わなくてはならない場合として、次の3つを挙げて、くわしく論じている。

- 1 専門用語のように、それが指すものがはっきりと決まっている場合。
- 2 定着している訳語がある場合。
- 3 慎重に選ばれた用語の場合。

ここでわたくしが本エッセイの(上)で論じたことに続ければ、SL を精密に理解したあとは、ここで把握できた<意味>を、その内容を記憶しておく、あるいは、通訳ノートに記す。通訳ノートには、SL の個々の単語を、聴こえてきたままに書いていくのではなく、把握できた<意味>を通訳者自身が思い起こすことができるような形で、記しておくことが大切である。

そして、その内容を、spontaneous に、SL での文言にとらわれずに、再び言う——これが通訳の最終産物である。ここで、本エッセイ(前半)で述べたことに戻る。

5.2 a priori に知っていないと聴き取れない

筆者の息子が10歳前後だったころ、オーストラリアにしばらく滞在する機会があった。あるとき、この息子がこんなことを言った—「お父さん、オーストラリアではみんなにここして、『ハロー太夫』と言うね」と。さらに、「そのあと、ワチャネーって言うよ」と続ける。もちろん「ハロー太夫」は How old are you? と親しく語りかけられているのである。しかし、英語をまったく知らない息子は、これを「ハロー太夫」と聴いてしまう。オシログラフで記録すればまったく同じものを、How old are you? と聴いたり、「ハロー太夫」と聴いたりしてしまうのである。つまり、英語で how と old と are と you という単語があり、それがあある韻律 (prosody) で発話されると、「歳、いくつ?」と訊かれているのだということを前もって知っていないと、How old are you? と認知できないのである。

駅のアナウンスでは、「豊橋行」と「豊田市行」とは混乱しやすいが、この双方をよく知っている地元の乗客はこれを厳密に聴き分ける。しかし、初めて愛知県を訪れて豊田市に行きたいが豊橋という地名を知らない乗客は、「トヨハシ」とアナウンスされてもこれを「豊田市」と聴いてしまうだろう。通訳者の中には、「知らない単語、とくに固有名詞は、聴き取れないことが多い」と述懐する者もいる。

さらに、耳で聴いてある単語の集まりだと認知できた段階では、多くの場合、その意味をも同時に理解している。理解できない発話は「えっ、今、何言った?」と問い返すことになる。とくに phonetic rules の異なる言語が関係する場合には、ここにむつかしさがあると言えるのかもしれない。

つまり、セレスコヴィッチの言う通訳のプロセスの第一段階で「発話を耳で聴いて認知」する(邦訳では「意味を運ぶ言語シニフィアン」の聴取)する(セレスコヴィッチ、2009:10)ためには、まずその言語を前もって(a priori に)知っていないてはならないのではなかろうか。

5.3 意味の多層性

筆者が国務省で随行通訳を始める前に、上司の故 J. ウィッケル氏がこんな話をしてくれたことがある。氏は英語を母語とするが、日本人夫人をもち、多くの日本人よりもきれいな日本語を話す。

「日米漁業交渉の時、日本の農林大臣がはじめに20分ほど意見を述べた。わたくしはこれを英語に同時通訳した。これが終わると、アメリカの首席交渉担当者がわたしに向かって、『What's the heck is he trying to say? = あいつはいったい何が言いたいんだ?』と怒鳴った。でも、それを判断するのは、首席交渉担当の彼の役割でしょう。だからわたしはこれに直接に答えずに、『あなたはいったい何がおっしゃりたいのでしょうか?』と訳したよ」

ウィッケル氏の英訳はいろんな意味で非の打ちどころのないものだったと思われるが、その英語を聞いた交渉担当者は、農林大臣が何を言いたいのか、分からなかったのである。つまり、semantic content としての<意味>は通じていたが、話者の「真の意図」は伝わらなかったと言えるのであろうか。

このような例は、佐藤栄作首相とニクソン大統領の間で首相の「善処しましょう」という表現が元になって誤解に至り、1970年代のふたつのニクソンショックに結果したと言われることに見られる。この時の通訳者はこれを *I will take care of it.* と訳したと伝えられている。

話し手が伝えたいことをまず通訳者は把握しなくてはならないが、価値自由という方法論(本エッセイ(上)の125-126ページにおいて説明をしている)を身に着けた通訳者にとってもこれがそれほどすっきりとはいかない場合がある。一つは、①話し手が自分でも何がいったのかあまりよく分かっていない場合、そして②何を言いたいのかをそのまま言わない場合である。こういう場合には、いささか事情は複雑になる。日本語話者の場合、このようなことが往々にして起きる。

ほんとうに①のようなことが起きるのか？ わたくしの経験で、こんなことがあった。ある会議で日本人が議長に選ばれたことがあった。りっぱに議長の役をやっている海外の人に驚かれる場合もあるが、いつもそうとは限らない。この国際組織では、加盟団体の納める会費を値上げしようとう案が執行部から出た。これはいわば加盟組織にとっては深刻な問題である。朝からこの件について各国が賛否の意見を述べ、昼食時間が近くなった。さて、これからどうしようかと、代議員たちは議長の判断を待つ。そこで彼は、おおよそこんな議長発言をした。

「ええー、①みなさま、どうも、ほんとうに、ありがとうございました。②この問題は、きわめて重要な問題であります。拙速はいけません。③しかし、時間は無限にあるわけではありません。どこかで決断をしなくてはなりません。④ただ、あとで後悔するような決断は、なんとしても避けなくてはなりません。⑤しかし、昼食にはこの国の首相に招待を受けていて、これに遅れたりするなどという失礼なことはするわけにはいきません。…」

この会議は同時通訳方式で行われていて、筆者はほぼこのまま、英語にするほかなかった。①は代議員が真剣に討論をしたことにたいする感謝である。英語では、*Thank you very much for your active participation in our discussion (over a crucial matter).* とする。②以下はほぼその通りに英語にする。しかし、途中から代議員たちは持っていたボールペンを机の上に投げ出してしまう者や、いすの背にもたれかかってしまう者、そして、同じ会場に設けられた仮設ブースの筆者たち通訳者の方を覗き込む者が出てきた。いつものように、男性の声は筆者だけだったので、みんな筆者の方を見る。「お前、ちゃんと通訳してるのかよ！」と言わんばかりである。

日本だったら、この議長も、このように話している間に、どこで何人くらいが、そして誰が肯いたか、何人くらいがわずかに首を横に振ったかなどを見ていて、結論を出すという奥の手があり、このような裁きが名議長の証しとされるかもしれない。しかし、ここではそのような「腹芸」は通用しない。通訳者もお手上げである。

また、言いたいことははっきりしているのだが、それがストレートに出てこない場合がある。「そろそろ昼食にしませんか？」と言う代わりに、「ところで、今、何時ですか？」と言う。『Noと言わずにNoと言う方法』という英語の本があるともいう。有名な作り話(らしい)に、夏目漱石が松山で英語を教えていたころ、'I love you.'をどう訳すかと学生たちに訊き、その答えに満足せず、自分なら「今日は月がきれいですね」と訳すという話が伝わっている。それでは逆に、「今日は月がきれいですね」と漱石が言ったのを 'I love you.' としていいものだろうか。愛の表現は拙論

を書いている間でさえ、世界中でみんなが必死に考えている。それをすべて 簡単な 'I love you.' としまっていていいものであろうか。そして、本当にこの人が 'I love you.' と言いたかったのか、ただ単に月を愛でただけなのか—これは定かではない。しかし、この日本語を 'We have a beautiful moon tonight, don't we?' と「訳し」たら、'That's very true, isn't it? So?' ですまされてしまうかもしれない。

つまり<意味>にはいくつかの層があることを考えざるをえないのではなかろうか。筆者がある北京での学会の報告で、多くの日本人通訳者が日本語はあいまいで、これに苦しんだことがあるとのアンケート調査(後出)を引いて、さらに次のように述べたことがある。

「意味にはいくつかの層があると考えて、少なくとも意味の 3 層を区別すべきだ。①セレスコヴィッチのいう *primary meaning* (辞書的な意味)、②セレスコヴィッチのいう<意味>という層、そして③話者の真の意図という各層である。①の層で通訳すれば、最終成果は支離滅裂になろう。セレスコヴィッチは②の層で通訳するのがいいという見解であり、たしかに通常は②の次元で仕事をするのがいいであろうが、日本語では②と③の層がその具体的表現の上でかなり乖離することがある。<言語明瞭意味不明>の日本語を話すときれた政治家もいるくらいだし、あいまいに言うのは日本の美風だと信じている日本人もいる。そして、②の段階の通訳では「意図」が伝わらなかつたり誤解されたりする。しかし、通訳者が③の層で通訳するのは、解釈のし過ぎという危険が伴う。これは、話し手の考えなどに精通している場合などに限るべきだろう。」(Kondo, 2006) (後出)。

ここで①の層で通訳をすれば、こんなことが起きかねない—オーストラリアの連邦化(1901年)前の状態で英国の植民地を *independent colonies* とすることがある。単語の辞書的な置き換えだけをすると、「独立した植民地」などと言ってしまう。「植民地が独立しているって?」ということになろう。

そして、究極的な話し手の「意図」は、通訳者にとっても推し量りがたい場合がある。あるいは、それが推定できても、そこまでを通訳者として最終成果として言うのは危険な場合がある。どこまで目標言語で最終成果として表現していいのかという判断は、おそらく通訳者の下す判断としては、もっとも高度な判断であろう。

通訳者を信頼して、事前に綿密な打ち合わせをし、あるいは付き合いが長くてその話し手についていろんなことがよく分かっている場合なら、踏み込んだ解釈を提供できよう。逆に、「もしわれわれ通訳者をただ単に『縦のものを横にする機械』と見るのでしたら、もちろん、よろこんでその役割を果してさしあげますよ」とも言える。筆者は、話し手との間に深い信頼関係ができ、自信をもって深い解釈ができるという、通訳者冥利に尽きる幸せな体験をいくつもすることができた。

この北京での学会で、会議直後に廊下で中国人研究者から質問を受けた—「おっしゃったことがよく理解できない。もし日本語がそんなにあいまいだったら、日本はあれほど発達した経済を作ることができないのではないか。このあいまいさは、これを英語に訳さなくてはならない時(だけ)のあいまいさではないのか」という質問である。つまり、日本人同士は十分に理解し

合えている、さもないればこれだけの国の発展はありえないだろうと言うのである。

しかしその後、東日本大震災が起き、福島第一原子力発電所の事故が起き、そこでは、ある重要な局面で、首相官邸と東京電力との間に誤解が起きていたことが伝えられている。東電が現場から「撤退する」としたのは、文字通り「全員」が福島原発から撤退するのではなく、必要な要因を残しておくことを前提としてこう言ったのを、菅首相は文字通り「全員」撤退してしまうと解釈したというのである。政府の事故調査・検証委員会では「東電が全面撤退を考えていたとは断定できない」としたが、われわれが日本語を使って日々の生活を送っていることを考える際には、問題はそもそも双方が母語である日本語で対応していてこのような誤解が起きたこと自体であろう。「善処する」と聞いてほんとうに「ちゃんと行動をとるだろう」と誤解する日本人は今ではまずいないであろうが、双方で明確になっていないことを前提として対話してしまって誤解を生んでいることは、案外と頻繁に起きているのかもしれない。

5.4 high-context vs low-context language と言語間の距離

セレスコヴィッチとキルヒホーフが通訳の原理を理論化したときに頭にあった言語は、おそらくフランス語・英語・ドイツ語・スペイン語などであろう。筆者の場合には、日本語を母語とする通訳者として、日本語と英語の言語ペアを頭においている。そして、セレスコヴィッチの意味の理論は、言語間の距離の大きい、日英語などの場合によりよく適用できると考えている。それを示すひとつの理論的道具がここにいう、コミュニケーションにおける言語の役割の大小である。

このことを論じる前に、英仏語間の距離はたとえば日本語と英語との距離よりはるかに短いと言えることを確認しておこう。言語間の距離については、セレスコヴィッチも言っている次のようなことから確認できる。セレスコヴィッチは、1 語と 1 語を対応させれば *semantic meaning=primary meaning* を伝えるが、「それではメッセージは伝わらず、目標言語による発話＝最終成果 も支離滅裂な表現に近くなってしまうだろう」(Seleskovitch, 1978: 8)とする。ただし、1 語 1 語の対応ができることがあり、それは似通った語源をもち、似通った音韻をもった単語の場合のみで、この場合は、元の発話と同じような速さで再生できる」(ibid.)とする。

もちろん、日英語間で語源を同じとする単語はないことを前提とできるし、文の構造についても、英語とフランス語は近いのに対して、日本語はこれがまったく異なる。日本語には主語がいらない、つまり基本文型が「主語＋動詞」からできているわけでないところから違っている。名詞に単複の別もないことがほとんどである。

日本語をごく自然に話すアメリカ出身の友人と話していて、「きのう、動物園に行つてね」と言ったら、間髪を入れず、「だれが？」という問いが返ってきて、驚いたことがある。たしかに筆者の話した日本語には「だれが」行ったのかが示されていない。

日本では名詞の単複を明示する必要がない。最近では、なんでも「たち」をつければ複数形になると考えているような日本語が書かれることがある。「人たち」「木たち」「雲たち」「机たち」などということばが頻出する邦訳書がある。「猫たち」は日本語でも、「木たち」「雲たち」「机たち」は(擬人法でない限り)自然な日本とは筆者には思えない。「わたくしはわたくしの手の中に 1 本の鉛筆をもっています」という種類の文も、英語を習得するある段階で、英単語をこのように日

本語で言い換えるのも意味があるかもしれないが、それ以上ではない。

さらにこの問題を、high-context および low-context culture/language という道具を使って考えることもできる。これは文化人類学者エドワード・ホール(ホール、1979)の言ったことで、high-context culture/language とはコミュニケーションにおいて context(前後の状況・文脈)が大きな役割を果たす文化およびそこで使われる言語のことで、それだけ言語自体に頼る度合いは低くなる。逆に、low-context culture/language とは、コミュニケーションにおいて context の果たす役割が小さく、したがって、言語に頼る度合いが高くなる。端的に言えば、日本語は high-context の言語であり、英語は low-context の言語である。

日本語では、コミュニケーションにおける context から行為者がわかっている場合、双方で前提とできると思われている場合には、文の主語はいらない。英語では、文の基本は主語+動詞で、誰が(何が)行為者であるかはみんなにわかっている、わざわざ I, You, He, She などと主語を入れ(同様に in MY hand とか by YOU などと、いちいち人称代名詞を使って)、context にその理解を任せない。しかも(gender-neutral な英語を模索しつつも) she/he の区別をいちいち、英語文の構造上、表示しなくてはならない。

こうした日英語間の差は、通訳に際しては、大きな問題となる。日本人話し手は主語や名詞の単複がその context では必要だと思わない限り、明示しない。しかし、これを英語に通訳する際には、いちいち主語にあたる単語を入れ、名詞が出てくれば(ほとんどの場合)いちいちその単複を明らかにしなくてはならない。「副社長は不在でございます」と案内嬢が言う会社は副社長単数制か複数制なのか? 「ここで野党は急に強硬な手に出た」という「野党」は 1 党しかないのかあるいは複数党あるのか。「すみません、ちょっとそこの本を見せてください」と言ったら、これは 1 冊の本を指しているのか、あるいは数冊を指しているのか。また、日本語は文を終えるときに、「...だよ」とするか「...です」とするか、あるいは「...でございます」などとするかを決めなくてはならない。相手との社会的関係を適切に測定しなくては「正しい」日本語にならないのである。

通訳者はここで、自然な英語に訳すためには、話者の考えている主語を正しく言い当てる、副社長、野党、本の単複を前もって知っているか、あるいはその場で推定しなくてはならない。もちろん、これをうまく切り抜けるいわば産業機密をベテランの通訳者はみんな持っている。しかしそれでも、いつもそれが有効だとは限らない。

こうなると、日英通訳は英日通訳よりはるかに膨大な背景の知識や準備が必要とされることになる。そもそも日本の high culture(美術・文学など)、社会経済の諸制度を英語で述べるのは容易なことではない。それに加えて、個々の場合に、high-context language である日本語で提供されるよりはるかに多くの情報を low-context language である英語では表明しなくてはならない。

5.5 明治以来の造語(=確立した訳語)を使うことと「カセット効果」

まず、専門用語、キーワードについては、明治以来、いや、江戸末期から、われわれの先達が苦労して造語してきた訳語で、今ではすっかり定着してしまって、いわば定訳になっている訳語がある。これはやはりそのまま訳さなくてはならないだろう。government は「政府」としく

てはならず、これを「お上」などとしては現代の通訳者はつとまらない。democracy をいまさら「民衆・大衆のために治めること」などと訳しても誤解を招くだけであろう。かつては「民本主義」と訳されたこともあるが、今では無条件に「民主主義」と訳さなくてはならない。rights は「権利」で、society は「社会」、経済学で言う demand, supply, production possibility curve などはそれぞれ「需要」、「供給」、「生産可能性曲線」で、monopoly は「独占」、oligopoly は「寡占」である。経済の話をしているときに demand を「要求」などしたら、わかってもらえたとしても、「この通訳者、なんにも知らないな」と思われるのが関の山であろう。さらに医学の通訳で、pancreas を「膵臓」と訳さなかったら、患者が死んでしまうかもしれない。こうした単語は「言語を消してはならない」。それに対応する日本語を出さなくてはならないものである。

5.5.1 やっかいな問題—カセット効果

ただここに、始末の悪い問題が潜んでいる。まず、このような訳語はあきらかに英語など西洋語の訳語だということが日本人にはすぐに分かってしまう。言語学者の柳文章氏は『翻訳語の論理』(1972)などで、こういう訳語には「カセット効果」があると論じた。カセット(cassette)とは今では録音テープを指すが、もとは、宝物の入った小箱という意味であった。つまり、このような漢字 2~4 字からなる漢語には、その元に英語などの西洋語があって、そしてそこには高い文明がある、学問の蓄積がある、無条件に受け入れなくてはならないような「宝物」があるという感じを、聴く人・読む人に与えてしまうということである。現実の生活とはかけ離れた「権利」などというものも、とにかくそれを受け入れて、分かったふりをしなくてはならない、そうでなくては知識人と認めてもらえないと感じさせる効果がある。だからほんとうに「権利」とか「社会」という新しい概念と取り組んで、悪戦苦闘して学ぶというプロセスを経ずに、分からないまま受け入れてしまったというわけである。

だから明治以来、日本の知識人は現実離れした概念を、清水の舞台を飛び降りるような気持ちで「呑み込んできた」。大学ではみんなこれをした。これが器用にできると大学院に行き、さらにこれがうまくなり、やがて、同じことを学生に押し付けるようになる、というわけである。

東南アジアに行くと、日本では大学の教科書が日本語で読めるのが羨ましいと言われる。これが可能になったのは、明治の先人たちが血のにじむような必死の努力をしたからであり、カセット効果をもつことばがいちおう日本語であることから、多くの日本人に「理解され」、日本の(表面的な?)近代化に大きく貢献した。

たとえば、金田一春彦はその著『日本語』において、世界の中での日本語を見ると、それが、学術用語が完備していること、大学の講義を自国語で行うことができること、英語・ドイツ語・フランス語などの日本語への切り替えに成功したこと、それには漢字に「新しい内容の単語をどんどん新造する能力をもっていた」おかげであったことなどを挙げて、「日本人の場合、中学生ぐらいになればその漢字から、その意味の大体の見当をつけることができ、どんな本でも、大体のところは理解できるのではないか。これは実に漢字の徳であって、明治の学者が新しい漢字の熟語を作り、それが一般の人にもある程度、理解できた、そのようにして欧米の学問の水準に追いついていくことが出来たのではないかと考えられる」(金田一、1988: 75-81)としている。

しかし、大学を出て、現実の日本のあり方を目の当りにすると、こうして分かったつもりになっていたことが、「カルタの城のようにがたがたと崩れて」、学んだはずの西洋思想は消えて、元の木阿弥となってしまうと柳父氏は論じる。そして個の確立の大切さも民主主義も消えてしまう。きのうまでシューベルトの歌曲をドイツ語で歌っていたのに、次の日には演歌を歌うようになるようなものかもしれない。

ただし、たとえこのような造語がこうした複雑な問題を潜在的にもっているとしても、今になってこのような訳語を使わずにすますことはもはやできない。われわれ通訳者にできることは、あえて難しそうな漢語を多用して分かりにくくするような、それで偉そうに聴こえさせようとするような日本語は使わない、そして、専門用語など以外はできるだけ自分のことばで、まさに *spontaneous* に語り、翻訳語に自分の思考を預けてしまうようなことはしない、ということになるであろうか。

福沢諭吉は「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」と言った。これはひょっとしたら、アメリカ独立宣言にあることばで、“All men are created equal.”「すべての人間は平等に創造されている」という英語を、自分も納得し、読んだ人も納得するような日本語で表現したものなのかもしれない。彼は家にいたお手伝いさんに自分の書いたものを読んで聞かせ、分かってもらえるまで推敲したと言われている。われわれがこんな「超訳」をしたら、「あれは通訳ではない」と言われること必至であろうが、その精神だけはぜひとも学びたいものである。

また、たとえばドイツ語では、「酸素」を示す語に *Oxygenium* と *Sauerstoff* の二つの単語がある、前者は英語で *oxygen* と言っている語からも想像のつく、語源をラテン語にもつドイツ語で、後者いかにもドイツ語本来の言い方である。この両者の間に、それぞれのもつ *implication* に別のものがあるかもしれない。また、インドネシア語では *democracy* は *democrasi*、*demonstration* は *demonstrasi* と、原語が透けて見えるような単語を使っている。このような単語はインドネシアでもやはり「カセット効果」をもつのであろうか。

5.5.2 邦訳のむづかしいキーワード

英語の単語には(当然のことながら)それ独自の意味分野がある。これを日本語訳する場合、それぞれの *context* における意味をその複雑な意味分野の中から探して、適訳とする。ところが、同じ英単語が別の *context* では意味分野の別の部分を意味する場合がある。すると、これを表すためにまったく別の日本語を当てなくてはならないことが起きる。

たとえば、はじめに *captain* という単語が示したのは船の長であったので日本語では「船長」とした。しかし飛行機が登場して、同じ *captain* はこれを操縦する長の意味になる。すると日本語ではこれを「機長」とせざるをえない。さらに場合によって、主将・組長・団長・消防署長・給仕長、さらに陸軍の大尉・海軍などの大佐、海兵隊の大尉などとなる。*President* という単語を例にとれば、これは、大統領、国家主席(中華人民共和国の場合)、総統(中華民国台湾の場合)、会長、委員長(日本の労働組合の場合)、学長・総長など、きりが無い。そして *real* などという単純な単語もその使われる *context* によって、「実在的な、不動産、実像の、実質、実数、正絹、真正の(フーガ)」などと訳し分けなくてはならない。

日本語への通訳では、これらの異なった邦訳をすべて適切に使い分けなくてはならない。

そう簡単なことではない。

5.6 spontaneous な発話ができるか

セレスコヴィッチは、話す言語は spontaneity という性格があるので、「言わんとすることの意味に集中し、どのような単語を使うか、どのような言い方をするかは人為的に決めるというより、口から出るのに任せておけば自然に決まってくる」(Seleskovitch, 1978:10)と言う。

このことが何を意味するかによっても違うが、日本人にはこの言い方には気になるところがある。われわれ日本人はこれまで、文化的に、口に出して話すことは忌むべきものだと教えられてきた。万葉集には、この国は「言挙げしない国」、ことさらことばに出して言い立てることをしない国だとされている。おしゃべりは「姦しい」と否定的に見られ、男は「だまってサッポロビール」を飲むのが渋くてよしとされる。立て板に水の雄弁家は誠実でないともされる。最近では政治家の「腹芸」はよしとはされないし、庶民に分かりやすく話すのはプラスのイメージになりつつあるかもしれないが、ホーフステードの言う文化の玉ねぎ構造の中核部分、文化の基底に横たわる部分はそう簡単には変わらない(ホーフステード、1995: 7-9)。

したがって、われわれの多くは、まとまったことを人前できちっと言う訓練を受けてきていない。国語の授業時間は大部分、文章の読み方と漢字の練習に費やされる。言いたいことさえあれば、あとは自然にことばは口をついて出てくるようになるための訓練を受けていない。

通訳者は、その職業柄、しゃべらなくてはならないし、分かりやすく、時には早口で話さなくてはいけない。通訳職はたしかに社会に必要とされているが、同時に、その必要とされている職業を十全に実践するためには、日本文化がしてはならないと命じることがなくてはならない。これは不可触賤民の定義である。通訳者は格別にハリジャン(「神の子」)となる必要はさらさらはないが、市民権を得た、まっとうな専門職を遂行している者として認められたいものである。

5.7 Interpreters are there to interpret. (「鳥は飛び、魚は泳ぐ。そして通訳者は通訳をする」)

通訳者としてのささやかにして凛とした矜持をもつことは、専門職に携わる者として当然のことであり、これがなければこの厳しい仕事を十全な形で続けることはできない。このためにも、通訳者が自分のしごとに誇りをもって精進できるような社会的環境はきわめて重要であり、それだからこそ、有能な通訳者が生まれる。通訳者もそれなりの誇りを持ってその職業につき、その社会的な役割の完遂に励みたいと思っている。

しかし同時に、通訳職をさげすむのもおかしいければ、それを過度に誇るのもおかしい。通訳職はひとつの専門職であり、それ以上でもなければそれ以下でもない。

5.7.1 社会経済的環境の大切さ

かつて、本日本通訳翻訳学会の前身である通訳理論研究会(1990～2000年)において、手話通訳について知ろうと、国立リハビリテーションセンター学院の教官木村晴美先生を招いてお話を聞いたことがある。これがきっかけとなって、手話通訳者たちのお付き合いが始まり、その中で手話通訳者の報酬がかなり低いことを知った。筆者が手話通訳士協会の機関誌『翼』

に連載させていただいた中で、以下のように述べている通りである。

「手話通訳士の資格をもった方でも、3時間までが4,200円、そのあと、1時間ごとに1,200円ずつ増えるというのである。これだと、1日8時間の拘束で通訳をしても、10,200円にしかならない。手話通訳というしごとが当初、ボランティア活動と位置づけられていたという事情があると聞いている。しかし、手話通訳士は資格試験に受かった専門職であり、ボランティア活動をしているのではないとわたくしは思う。また、手話通訳という仕事だけでは『一家を養えない』、『食っていけない』となれば、基本的に手話通訳を専門とした職が成り立たないことになる。」(近藤正臣、2012: 7)

同じ『翼』No. 245の他の箇所では、このような手話通訳者の劣悪な労働条件について論じの中で、この座談会の司会者、日本手話通訳士協会健康対策委員会委員長寺垣英比古氏が以下のように発言している。

「司会/ ...手話通訳者は男性を筆頭に絶滅危惧種といわれています。10年、15年後にはかなり少なくなってしまうかもしれません。そうすると、当事者(聞こえない人)だけではなく、聞こえる国民も困るし、国や自治体も困る、皆が困るという事態になります。」(寺垣英比古、2012: 2)

他に職をもって、手話通訳の仕事をいわばアルバイトとしてするという状態では、良質のサービスを誇りをもって提供ということはできない。ありていに言えば、「男子一生(女子一生)を賭けるに足る」職業とはならない。

だから、AIIC(国際会議通訳者協会)では、職能団体としても機能し、クライアントと一種の団体交渉もしている。協会の会員は優れた通訳サービスを提供する、その代わり、国連の諸組織の通訳はこの協会の会員にしかさせない、さらに、週に一定数のセッションしか通訳をさせないという条件のもとに、通訳料をいくらとするという合意(いわば団体協約)を勝ち取っているのである。そして、自らの通訳料を下げて仕事をたくさん取ろうとする、つまりグレイマーケットに入ることを硬く禁じている。これは、通訳者の倫理の問題だとされている。こんなことをみんなが競争して行えば、通訳者の労働条件は下がるだけである。つまり「良いコミュニケーションはまた、通訳者の資格にも依る。だからプロ化(professionalization=この職業を専門職とすること)が大事なのである。そしてこれはまた、能力のある通訳者がしごとをするその条件にも依存する。だからこそ AIIC はその倫理綱領のなかに労働条件に関する項目を設けているのである(細部にわたってこれを具体的に言っているわけではない)。」(Jean-Pierre Allain, 2010)。

5.7.2 職業に貴賤なし

筆者は実質40年以上、通訳を職業としてきている。中には、「他人の言ったことを繰り返すなんてつまらないと思わないか」と言う友人などもある。筆者はこのように感じたことは、文字通り、一度もない。話し手がどうしても伝えたいと思っていることが聴き手にきちっと伝わったのを

見られること、嘯みあった議論が濃密に行われるために役に立ったと思えること——こうしたことが大きな楽しみである。

日本では、通訳職に対する社会的評価は必ずしも高くない。大学教員で通訳をしていた者は、これを隠そうとしたことがある。通訳なんて大学で教えるものではない、とされたこともある。そして、「あんなものは、英語ペラペラならだれでもできるんだろ」と言われた。

日本通訳翻訳学会の規約の第2条に「通訳の理論と実践および教育に関する科学的・多面的研究を促進するとともに、この分野の社会的理解の増進に寄与すること」とある。下線の部分は無意味な、口先だけの単なるお題目ではない。

しかし、通訳職にそれだけの価値のある仕事だと見ない見方は、他にもある。それが、通訳者であった人の口から洩れている。鳥飼玖美子氏の近著(鳥飼、2013)にはこのようなエピソードが語られている。

「同時通訳を一生の仕事にと夢を抱いていた駆け出しの頃に会った國弘正雄は、『同時通訳を一生の仕事だと思っています』と言う私に向かって、『同時通訳は確かに重要な仕事だけれどもねえ、一生をかけるほどのものかねえ。きっと君もいつかは自分の歌が歌いたくなるよ』と言いつつ放った。

『自分の歌』—わたくしはいつから、どうして自分の歌を歌いたくなったのだろう。」(鳥飼、2013: 155)

國弘氏は優れた通訳者であった。その彼が、後には参議院議員になっている。かつての中国の駐日崔天凱氏はかつて国連で通訳をしていたし、かつて香港政庁では、元通訳者が高官をしていた(近藤、2009: 12)。

本日本通訳翻訳学会会長をつとめることになる鳥飼氏はやがて、司会者に入る番組の通訳をするようになると、「私だったら、こういう質問をするだろう」と考えるようになり(鳥飼、op. cit.: 156)、さらに、「専門性を求めて通訳職から離れ」(鳥飼、op. cit.: 84)、「通訳者から大学教授に転身し」ていった(鳥飼、op. cit.: 90)。博士号を取り、多くの著作を著している。まさに「自分の歌を歌って」いるということであろう。

鳥飼氏はさらに後になって、「かつての自分が通訳という仕事を虚しく思い、苦しく感じたのは、通訳者の役割についての自分の理解が浅かったからではないかと考えるようになった」とし、「通訳翻訳に関する理論研究が欠かせないと確信するようになった」(鳥飼、op. cit.: 158)としている。そして通訳作業・職についての研究をするという形で、貢献を続けていられる。自身で再び通訳職に戻ったという話は寡聞にして耳にしないが。

もちろん、職業選択の自由は日本国憲法第22条で保証されているし、何を職とするかという問題には人生の機微がかかわっている。究極的には、他人に口出しができるものではない。しかし、通訳職を捨てるときに、まるで「通訳なんて、一生をかけるものではない、自分の歌を歌うことにこそ一生をかけるに値するものだ」と言わんばかりの論じ方には、<そんなことを言われる筋合いはない>と、筆者は感じざるを得ない。

筆者自身は通訳・翻訳と言う仕事が好きでもあり、今後も機会があればするつもりである。そ

して、國弘氏のことばを借りれば、「自分の歌を歌いたくな」ったことはない—筆者が歌を歌ったら、みんな、「脳みそが腐るから止めてくれ」と言って、耳をふさぐに違いない—。通訳職というひとつの専門職に就いている者としてすべきことをするのが私の責務だと思っている。そして、職業というのはどの職業でも同じで、皿を洗うのも、石鹸を作るのも、あるいはスーパーでレジをするのも、同じ意味があると思っている。「職業に貴賤なし」とは福沢諭吉も言っているではないか。

通訳というような、それほど簡単にできない仕事をしているのを、これがさせてもらえるのはありがたいとは思いますが、それを特に誇る気持ちはない。「法隆寺はだれが作ったか？ 聖徳太子？ 間違い！ 大工さんだ！」というジョークがある。筆者は自分のことを、この大工さんでいいと思っている。そして大工には大工の誇りがあるとすれば、通訳者にも通訳者の誇りがある。それ以上である必要はないし、それ以下であってはならないだろう。

英語に、*a cog in the wheel (or the machine)* (組織の中の小さな歯車) という表現がある。志の高い人は、こうはなりたくないと思うものだとされている。しかし筆者は、どんな小さな歯車であろうと、それが、クライアントが何らかの報酬を支払ってそのサービスを買おうとするものである限り、そのサービスにはそれなりの有用な働きがあるのだろうと思い、そうである限り、その巨大な組織が正常に機能するために通訳サービスが必須なのであると思っている。小さな歯車がすべて正常に機能してはじめて、あるいはその歯車がじゃまをしないとき (*interpreter* が *interrupter* にならないとき!) はじめて、大きな組織全体もスムーズに機能する。そのうちのひとつでも不具合が生じれば、機械全体に不具合が生じてしまう。法隆寺を造った大工さんのひとりでもいいかげんな仕事をしていけば、世界最古の木造建築として見られるまでその命を保つことはないだろう、と。

コスト意識の高い大企業が、あるいは大組合が、あるいは国際組織が、スムーズにその活動をし、その社会的役割を果たすために通訳者を雇うとき—たとえ「通訳なんて英語がペラペラなら誰でもできる」と言われようと—、その仕事をする通訳者がいいかげんな仕事をすれば、そのクライアントは困ることになるだろう。そして、通訳者が満足に行く仕事をするためには、会場と通訳ブースとを結ぶネットワークのオペレーターがきちっと仕事をしてくれることが必須であり、「裏方」である会議の事務局も汗をかいてくれなくてはならない。日本コンベンション・サービスの先代社長近浪廣さんは現役当時、『花道をつくり花を見ず』という本を書いており、この本の最初のページに、「われわれは裏方である。裏方の汗を喜びとしない者は去れ」と自身で揮毫した書を掲げている。この「裏方」の人たちにも同じように、いやいやながらではなく、「喜びとして」、誇りをもって、その責務を果たしてもらえなれば通訳者もまた満足なサービスを提供できない。

しかし、通訳者も裏方の仕事をしているとわたくしは思っている。だから、JCS などエージェンツの方々には筆者の仲間である。会議場という戦場での戦友である。同時通訳機器のオペレーターもまったく同じである。ある時、新潟市で行われた国際会議で、翌朝の新聞にその会議が紹介されたことがあり、そこには、「会議は同時通訳機器を使って行われた」という見出しが躍っていた。同時通訳を提供するのは通訳者ではなくて、「機器」だと言うのである。通訳者はそもそも存在もしなかった。これこそ、究極の裏方ではないか。黒子でさえないということであろう。

黒子は、いないことにはなっていますが、実際にはその姿は見える。この新聞は、機器のオペレーターの人が「うちの事務所に貼っておきます」と言ってもっていかれた。

しかし、もう少し考えてみれば、たいていの人間はみんな歯車で、その歯車の大小にわずかな違いがあるだけである。突き詰めれば、E.H.カーが『歴史とは何か?』で問うた、「人間が歴史を作るのか、歴史が人間を創るのか」という問いに達する。もちろん、だからシーザーやナポレオン、そしてレーニンのように、「この人がいたから歴史が変わった」と言えるような人は何人かはいるだろう。しかし、わたくしがこのような役割を果たせる人間だとは思ったこともないし、そんな大それたことをするのは怖い。

でも、人類史上、人間の生活にもっとも大きな影響をおよぼした近代の産業革命を引き起こしたのは、中産的生産者層と大塚久雄先生が名づけた、半農半工の名もない働く者、町でマニファクチュアを営んでいた小親方であった。だれが人類の幸福に一番大きな貢献をなしたか？ それは王様や貴族、あるいは数人の大発明家や思想家、遠隔地貿易で莫大な利益をあげた特権的商人たちではなく、ふつうの庶民たちであった——というのが、世界に誇れる日本の比較経済史の明かしてくれるところである。

筆者は経済学の論文も多く書いている。大学院時代に書いたものが専門誌に出たこともある(近藤正臣、1976)。しかし、こうした仕事を、これは「自分の歌を歌」っているのだと思っただけではない。ささやかな開発経済学への貢献がなせたのかなあと、ひそかにつぶやくのみである。いや、今ではそれもありえまい。「論文」の修飾語として、「誰も読まない」とつける今日この頃である。

ある時、ウィーンの子供時代の親友フランツのうちのひとり、フランツ・ポエヒハッカー(もうひとりの親友フランツはフランツ・シューベルト)に、「お前は通訳をし、通訳に関する論文を書いているのに、さらに経済学の論文を書くのはなぜか？」と問われて、このことを少し整理して考えようとしたことがある。まず、「通訳なんて英語がペラペラならだれでもできる」と言われていたので、筆者が個人的にそうは言われたくないと感じていたという側面もあったかもしれない。しかし、筆者は、大学の学部時代・大学院時代を通して、その専攻は社会科学、中でも理論経済学(通称近代経済学)、比較経済史学(通称大塚史学)、そしてとりわけ開発経済学を専攻としてきた。こうした分野におけるささやかな成果と通訳者としての英語力が相俟って、大塚久雄先生、小林昇先生、柳生圀近先生などの邦文論文の英訳作業につながっていった。学問の世界における異文化間コミュニケーションへのささやかな貢献である。しかし、このような論文は多くの場合、その80パーセントどころか90パーセントは他の人の言ったことを引用しているわけで、SL(起点言語)の解釈をその話者の立場に立ってまず精密に理解することが極めて重要である。これは通訳者の仕事と本質的に同じ作業をしていることになり、その作業を適切に行うことがまず必要なのである。

やがて、実は経済学の勉強は通訳にも大いに役に立つ、この両者の間には相乗効果があることが分かってきた。デンマークのオルフスには、経営大学院に古くから高名な通訳者養成コースが置かれている。大東文化大学において、大学院経済学研究科に「通訳論」が置かれて、多くの成果をあげていることが認められているのは、不思議でもなければ偶然でもない。受講

生が経済学を学び、修士論文を課せられていることが、通訳の訓練を支えているのである。

また、通訳に関する論文ないしエッセイは、通訳理論研究会のできる前から書いている(近藤正臣、1980; 1981)。この研究会を始めたのも、実は「通訳という職業」に負っている恩の万分の一でもお返しをしたいという気持ちが一番大きかった。そして、世界中の *colleagues* が研究をしているのにわれわれだけが何もしないのは通訳者として失格で、彼らと一緒にここでも何かして、やっと日本の職業人になれるんだ、世界の通訳者の仲間入りができるんだという思いがもっとも強かった。これが自分の歌を歌うことだとはついぞ思ったことがない。

通訳職はこのグローバル化の時代において、日本でも英語を話す人の数は多くなっても、やはり必須の社会的役割を担っている。エージェント(今はヨーロッパにならって、PCO=Professional Congress Organizer と呼ばれている)も、ほんとうにちゃんとした通訳のできる人は今でも必要とされていると言っている。もちろん、きちっとした英語が話せることなどは職業上の必須条項で、大工がちゃんと鉋をかけられる、庭師が美しく庭木を整えられる、歯科医が歯の病気を治せるのとまったく同じことだから、これをことさら誇るのはいり上がりもいいところであろう。ましてや、通訳者がその役割を果たせるような環境が整うためには、スピーカーの原稿を確保するエージェントの職員から会場の運営係、通訳機器のオペレーターまで、とても多くの方の協力が必須である。

もう一度言えば、通訳職のあるべき姿とは、通訳者はささやかにして凛とした矜持をもち、それが可能になるような社会経済的条件が確保されるなかで、その *profession* の実践を継続していくことだと筆者は思っている。

5.8 日本人スピーカーへのお願い

日英通訳の実態についてアンケート調査を行ったことがある。「日英通訳に独特の問題点があるか」という自由記述の項目を設けた。応えていただいたのはその 80 パーセント以上がベテラン通訳者であったが、応答者のおよそ 3 名に 1 名が、「日本人スピーカーの話す日本語があいまい、主語が示されていない、わからない」、「日本語に特有なあいまいな表現がある」、「あいまいさが日本語の特徴」など、いわば日本人スピーカーに対する苦情が頻出した(近藤、2005: 268-269)。積年の怨念が噴出してきているような迫力に圧倒されたものである。

また、このような発言をした日本人の話し手がいたことが例として述べられた—「みなさま、海外から、遠路はるばる、よく本会議に参加していただきました。まことに、サンキュウ・ヨンキュウ・モロキュウ・オバキュウであります」。

この種の日本語のダジャレは通常の英語に訳すことはできない。通訳者が戸惑っている間に、会場にいる日本人は爆笑する。会場で通訳が出てくるのを待っている海外からのお客様は、「どうしたんだ? 早く通訳をしてくれよ」と言わんばかりに通訳室を覗き込む。

筆者も、毎年行われているある会議の通訳を担当したとき、海外側からの質問に対して、日本側の話し手は、ひとことこう応じた—「ああ、あれは勸進帳だったんです」と。もちろん、事情を知っている会場の日本人は大笑いする。イヤホーンをつけた海外からの参加者は、「何を言ったんだろう」と通訳室をやはり覗き込む。同時通訳では勸進帳の名場面を説明する時間はない。話し手自身がこの名場面を説明して、文化的なギャップを埋める努力をしてほしかった

と思う。

海外とのコミュニケーションにおいて橋を架けるのは通訳者の義務であり、これがうまくできたときにはとてもうれしい。通訳という仕事をしていてよかったと感じる時である。

しかし、異文化・異言語間のコミュニケーションをすべて通訳者に任せてしまうことはできない。話し手自身が、そこにある種々の陥穽を承知し、それに陥らないようにしなくてはならない。もちろん、コミュニケーションに失敗した時には通訳者もみじめな気持ちになるが、それよりもはるかに失うものが大きいのは、primary participants、直接にその会議に利害関係などの強い関心をもつ参加者・代議員などである。通訳者がもっともその持てる力を発揮できたときが、参加者ももっとも得るところが大きかったときである。これが可能になるよう、日本人スピーカーの方々にぜひともご理解とご協力をお願いしたい。

.....
【著者紹介】

近藤正臣 (KONDO, Masaomi) 大東文化大学名誉教授・モントレー国際大学院客員教授。日本通訳翻訳学会初代会長。

【参考文献】

- 金田一春彦(1988)『日本語』新版(上)岩波書店
 小間坂和一(2013)「There 構文の感覚と意味」『大阪経大論集』63(5), 143-159.
 小松達也(2013)『英語で話すヒント—通訳者が教える上達法』(岩波新書)
 近藤正臣(1976)「戦後低開発国開発論の苦悩」『世界経済評論』19(1), 71-78.
 近藤正臣(1980)「異文化コミュニケーションの目指すもの」『大東文化大学紀要第 18 号』<社会・自然科学>
 近藤正臣(1981)「異文化間コミュニケーションの意義」『社会科学討究』27(1), 183-211.
 近藤正臣(2005)「調査報告 B 言語への通訳—日本の経験 アンケート調査報告」『通訳研究』第 5 号:261-283. 日本通訳学会
 近藤正臣(2009)「とわずがたり:通訳者の仕事は通訳=解釈すること」『合気道探究』第 37 号
 近藤正臣(2009)『通訳者のしごと』(岩波ジュニア新書)
 近藤正臣(2012.6)「日英通訳者の世界から」連載第 31 回「音声通訳者の報酬」『翼』No. 245
 寺垣英比古(2012.6)「特集 登録手話通訳者の労働者性を考える Part 4/最終回、座談会」、『翼』No. 245
 鳥飼玖美子(1997)「英語教育の一環としての通訳訓練」『月刊言語』26(9), 60-66/
 鳥飼玖美子(2013)『戦後史の中の英語と私』(みすず書房)
 ホール、E. T. (岩田慶治訳)(1979)『文化を超えて』(TBS ブリタニカ)
 ホーフステード、G. (岩井紀子・岩井八郎訳)(1995)『多文化世界—違いを学び共存の道を探る』(有斐閣)
 ポエヒハッカー、F. (鳥飼玖美子監訳)(2008)『通訳学入門』(みすず書房)

柳父章(1972)『翻訳語の論理』(法政大学出版局)

Jean-Pierre Allain (2010). 'Conference Interpreting in Asia,' *Interpretation and Translation Studies*, No. 10: 292. 日本通訳翻訳学会第10回年次大会における報告

Kondo, Masaomi (2006). 'Multiple Layers of Meaning – Toward a Deepening of the “Sense” Theory of Interpreting,' *Interpretation Studies*, No.6 (『通訳研究』第6号):175-182.

Seleskovitch, Danica (1968). *L'interprete dans les Conferences Internationales: Letters Modernes*; English tr. by Dailey S. & McMillan, E.N. (1978). *Interpreting for International Conferences – Problems of Languages and Communication*. Wash., D.C.: Pen and Booth; ダニツツァ・セレスコヴィッチ、ベルジュロ伊藤宏美訳(2009)『会議通訳者—国際会議における通訳』研究社

Seleskovitch, Danica & Lederer, Marianne (1989). *Pedagogie Raisonnee de L'interpretation (European Communities)*; tr. Harmer, Jacolyn (1995). *Systematic Approach to Teaching Interpretation (The Registry of Interpreters for the Deaf)*

ⁱ なお、小松著のこの本には、次のように、どうしてもほっておけないような論点もある。ひとつは、「…be 動詞の特殊な、しかも最も頻繁な使われ方が、there+be+C という構文です。」として、**There are now 230 Japanese manufacturing operations in the United Kingdom, which …**という文章を挙げていることである(同書、41ページ)。もちろん、Cは補語のことである。つまり、**230 Japanese manufacturing operations in the United Kingdom**はこの文の補語だとしているのである。**There+be+C**の構文の、ここに言うCは実は未だに議論の尽きない構文だとされ、多くの論考がある(たとえば、岩澤勝彦氏および河原清志氏と筆者とのメールの遣り取り、2013)。一方で、文法的には**there**が主語だと言うこともできる。たとえば、**There is nothing wrong, is there?**では付加疑問文で倒置されているし、**There being nothing else to do, we went home.**では不定形動詞の主語となっている。他方、主語は何かを指示していて、述部がそれが何を・どうあるという働きをするのに、**there**構文では、文法的に見た述部は**there**が何を・どうあるかについて述べているとは言えない。ましてや、**there+be**の次に来る名詞(句)が補語だとすれば、これはこの名詞(句)が主語のことを説明することになる(たとえば、**He is John.**の意味を取ろうとすれば、「**John**は彼のことを言うのだ」と解釈するのがもっとも適切であろう)が、この構文ではそのように言うのは無理であろう。

There構文についてはいくつかの論考がある(たとえば小間坂和一、2013のあることを河原清志氏とのメールの遣り取り、2013で指摘していただいた)なかで、この小間坂論文では、この**there**は虚辞(形式主語)と見ることはでき、「**There**構文の**There**は文頭に位置しているが、ものの存在を示す虚辞(形式主語)と過ぎず、後に続く不定型名詞が真情報である真主語です」(小間坂、143ページ)としている。発話の意味について「正しい聞き取りと理解」をしなくてはならない通訳者の任務から考えれば、**There be**に続くのは「真主語」と捉えるのが適切であろう。これを補語だとするならば、以上のような先行研究を踏まえ、これを批判するという形をとるべきであったと言わざるをえない。意味から考えれば、**There is a book on the desk.**という文は、**A book is (liesあるいはstands) on the desk.**とも言い換えられることから、意味を把握しようとして聴く場合に<**There+be+主語**>だと見るべきことは明らかだと思われる。もう一つの形式主語**it**の例を考えれば、たとえば**It rained yesterday.**という文では、「雨が降った」という意味内容が重要である。

それに、英語の構文が**S+V+C**と**S+V+O**の2つだというのは、「荒っぽい」どころか、間違いだと言っていいのではないかと筆者は思ってしまう。英語の文型の数についてもいくつかの説がある。筆者は、とくに意味を把握しようとして英文を読んだり聞いたりする場合には、たとえば**S+V+O+C**はとてもおもしろい構造の文だとも思っている。というのは、意味を考えると、この構文は**S+V**という英語の基本要素が2回、ひとつの文章にあるととったほうが意味がとりやすいからである。これ以上は言わずもがなのことかもしれないが、**We call him John.**は**We call~**と**He is John**というふたつのことを1文で言っていることになると思った方が意味が取りやすい。**He hears her sing.**も**He hears**と**she sings**という文がふたつ、最初の1文に入っていると考えると、その意味はもっとも把握しやすい。